

CONTENTS

- シリーズ この人に聞く 第18回
2-3 木山大輔さん
「未来を担う子どもたちこそ、懸けたい」
- 4 サタボラSDGs勉強会 中間報告
「エネルギー・環境問題を身近なこととして考える」
- 活動紹介
5 ユニセフ初体験の子どもたちへ
楽しく学べる工夫
- 6 活動フォトニュース
- 7 活動日誌 (8月～10月)



笑顔は最高の
おもてなし

大地震の被災地の子どもたちとポーズをとって「ナマステ」(こんにちは)。がれき撤去の作業で、崩れた学校を訪れた木山大輔さん (2015年9月、カトマンズ)

未来を担う子どもたちにこそ、懸けたい

——カトマンズで子ども食堂

ネパールの首都カトマンズ。5つの山に囲まれた盆地は、約8000年前は湖底だったという。その街の一角に今年1月、子ども食堂が生まれた。大学を休学して、カトマンズの子どもたちに寄り添って活動していた木山大輔さん。弱冠22歳の日本人青年が、誕生にかかわっていた。



株式会社「サンタン」
社会貢献活動部
ネパール駐在員

きやま だいすけ
木山 大輔さん

小学校の大きなブランコで子どもと遊ぶ木山大輔さん（2018年10月、カトマンズ近郊のワルティンブ村）

独自にネパール支援

2015年4月26日朝、木山さんはテレビ画面が映し出す惨状に釘付けになった。前日の25日昼に起きたネパール大地震。マグニチュード(M)7.8とも8.2とも言われ、犠牲者は9,000人にのぼった。その衝撃が、今の活動につながるとは、そのとき、思っていなかった。

——京都外国語大学に入学したばかり。新入生のときですね。

実は中学1年のとき、家族と移住していたニュージーランドで大地震に遭いました。余震もありました。そのときの恐怖がよみがえりました。

——ネパール大地震が、今の活動につながったのですか。

ニュース後の大学の授業で、ネパール支援がテーマになりました。「お金をかけないで支援できる方法は」。いろんな意見が出て、「このまま議論だけで終わるのはもったいない」と、大学認定の支援団体を学内で立ち上げました。

——具体的には、どうされたのですか。

2015年夏に1カ月間、自費でカトマンズに大学で集めた募金を持っていきました。被害の大きい農村部などでがれきの撤去などを行いました。テントを張って寝泊まりしながら、現地の人々の話を聞きました。帰国後、フリーマーケットやチャリティイベントを行い、現地での活動でつながった信頼のおける現地ネパール人を通じて義援金を送りました。

——2年生になってからも、ネパール支援は続けたのですか。

はい。2016年になり、物質的な復興支援よりも「心の支援」

が大事に思えてきました。入学当初はヨーロッパに興味があったのですが、ネパールへの想いが大きくなり、8月初旬に東南アジアを巡りました。そして8月下旬に、カトマンズでミュージックイベントを開催。日本からダンサーやDJもかけつけました。

現地語を学ぶことから

——今の勤務先の株式会社「サンタン」との接点はいつごろからですか。

大学の先輩が「サンタン」にいて……。その先輩が「サンタン」の社長の大間知明夫さんの親戚で、震災後、ネパールでボランティアをしていました。震災直後の2015年5月ごろからネパールのことを教えてもらいたくて先輩とお会いし、その後も情報交換などを続けていました。

——大学2年、2016年9月から休学されました。

カトマンズから帰ってきて、ずっと現地の様子が頭の中をぐるぐる回っていました。後期の初日の授業に出ても、何も入ってこなくて。休学しようかな、となり、母親のいるニュージーランドに行きました。「サンタン」の先輩とは国際電話で話をしていた……。その過程で、大間知社長がネパール復興のことを考えていて、現地に駐留して活動できる人材を探していることを知りました。

——2018年6月には「サンタン」のネパール駐在員として、カトマンズに定住する決心をされました。

カトマンズで暮らし始めて、「震災ビジネス」で私腹を肥やしている人々がいることを知りました。震災直後の海外からの救援物資は、空港で滞留。義援金の使い方も不明瞭です。これでは、善意をきちんと活かせない。騙されないためには、現地のことを

知り、現地の人々の懐に飛び込まなければ……そう思って、まず、語学学校に通い、現地語を懸命に学びました。

——信頼できる人を見極めないといけない。そこから始めたのですね。

8月に「シュレステ・マヒラ・サムハ」という女性ばかりのボランティア団体に出会いました。家庭の主婦が集まっている、そんな「女性会」が複数ありました。カースト制度が残り、女性は差別されやすい。「女性会」発足には、そんな背景もあるそうです。

——信頼できる団体だったのですね。

そうです。彼女たちと話をして、どんな支援をしたらいいのを考えていきました。最初は「僕はソーシャルワーカー」と思って、いろんな人や社会資源をつないでいこうと考えていました。でも、そうではない。もう少し引いた形で……、「支援」ではなく「サポート」。現地の皆さんの主体性を尊重しながら、進める。そう考えが、変わっていきました。

生きる糧となるもの

——「サンタン」が運営資金を寄託されるわけですが、具体的にどんな形になっていきましたか。

キーワードは、「子ども」に収斂^{しゆうれん}していきました。ネパールは格差社会の側面があります。一握りの人々は裕福ですが、多くは貧しい。「あっ、ガチの場所がある」と思って、ある地区で「子ども食堂」を始めることを決めました。ネパールの平均月収は2万円ぐらいですが、その地区は1万円以下。子どもたちは放課後、居場所がなく、図書館などで勉強をみてもらっています。おうち是一部屋に一家4人のところも。やせ細っている子どももいます。子ども食堂を開いて、栄養を摂ってもらわなければと思い

ました。12月まで準備をして、今年1月からスタートしました。

——どんな様子ですか。

毎月2回、30～50人の子どもが来ます。4～16歳ぐらいまで。カレーのルーとご飯など、自分の家ではいつも同じメニューで単調な食事です。単なるご飯ではなく、栄養のある食事を提供しなければ、と頑張っています。「女性会」のお母さんたちが腕を奮っています。今後は、身長計と体重計を用意して栄養のバロメーターをとっていきたい。ネパールでは、身長計や体重計は身近なところには出回っていません。

——子どもたちに絞ったのには、どんな思いがこもっているのですか。

やはり、この国を背負っていくのは子どもたちです。未来は、子どもたちにかかっています。その点で、教育も大事です。栄養とともに、生きる糧になる教育も、充実していければと考えています。子どもたちに1年間アンケートをとり、何を学びたいか聞いたうちの答えのひとつが「アート」だったので、この夏から子ども食堂で「アート教室」を開いています。

——この9月末で、大学を退学されました。ネパールで活動されるのですか。

はい。アート教室の子どもたちは、模写は上手ですが、アイデア性に欠けています。自分のアイデアで、個性豊かに自由に描けるように、スペシャルゲストを招いた授業や、カトマンズのまちの壁をキャンバスに使って教えていけたらと思っています。そして、それを多くの子どもたちが見て育つような環境になったらいいなど……ゆくゆくは、「児童館」みたいな空間も作れればと考えています。

(文・平田篤州)



カトマンズの子どもの食堂にて (2019年5月)

